

# 碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可  
 神奈川 碩心会 発行

現在会員数 171名  
 10月地区別 286名  
 10月地区別合計 60名  
 61年10月地区別合計 (517名)

61年10月号 (171号)  
 発行 者 萃  
 根 岸 岳  
 編 集 者  
 中 村 愛 岳

## 小諸での出あい

寺脇歌風

爽やかな天候に恵まれて長寿会の一行は長野県に向いました。歴史に詳しい上手なガイドさんで、島崎藤村の住んでいた所など説明されると、あの『小諸なる古城のほとり』を思い出し、吟の勉強をされていてよかったです。

そして詩文通りの岸近き宿に泊りました。窓から見る千曲川のゆうゆうと流れる水が目についこまれるようにうっとり大いに感動、夜の宴会で、思わず『小諸なる古城……』を吟じさせていたとき楽しい旅でした。

帰路食事をしている時、長寿会の会長様がきて話すには、自分が高校生を受持っていた時、漢文の時間に教えていた『小諸なる古城……』が頭に浮びとても懐しく聞いていましたと言われ、私も何回か吟をやらせていたときでしたが、こんな嬉しい事ははじめてでした。その方が石川様で、今は私達と一緒に吟をやっております。お互いに助け合いながら吟の練習をさせていたといっております。

## ◎ 行事予定

◇ 第36回逗子市文化祭 十一月二日(日)  
 詩吟詩舞発表会 逗子図書館ホール

◇ 第20回葉山町文化祭 十一月三日(祭)  
 詩吟詩舞の会 葉山小学校体育館

◇ 第42回神奈川県本部 十一月九日(日)  
 吟道大会 綾瀬文化会館

◇ 県本部高段者(七・八段) 十一月二十三日(祭)  
 審査課題講座 平塚農業会館

◇ 県本部高段者(皆伝以上) 十一月二十四日(日)  
 審査課題講座 平塚農業会館

## 自然と人生 (十月)

(秋漸く深し)

野路行けば、粟の収納の盛りにて、稲の収納もぼつぼつ始りぬ。蕎麦雪の如く、甘藷の畑は彌繁りに繁れり。百舌鳴く村に、紅なる黄なる星の如く柿の実の照れるを見よ。  
 十月十一日

# 第90回・全国大会参加吟行記

## 第一日目 千歳から洞爺湖へ

岩崎 惠 岳

羽田空港に着くとロビーには各支部の方がにこやかに集まっていた。添乗員の方より一応説明があり、漸く搭乗時刻となり約二百人の大移動となる。席に落ち付く迄しばし賑やかであった。

一時間二十分のフライトは長くもなく、千歳空港到着、待っていた五台のバスに乗り込み支笏湖へと向った。時間の都合で、車中より眺め、ガイドさんの話を耳を傾けた。冬でも凍らないという湖は秋色を漂よわせていた。

遠く羊蹄山を望み、美笛峠を越え洞爺湖畔に着く。昼食を済ませ昭和南山へと向う。昭和十八年に突然盛り上ったというこの山は、今でも煙をはき続け、個人の所有と聞いて驚く。

真向いの有珠山へは片道六分のロープウェイがあり、降りるとそこは一面草原で、洞爺全体が美しいパノラマの様である。左の方に歩を移すと、そこに珍らしい動物を発見、キタキツネだ！忽ち遠巻にカメラを

向けたので一瞬に逃げ出してしまった。山上は風が強く肌寒い。早々に熊物場へと足をのばす。深いコンクリートの中で餌をねだる姿はユーモラスだ。

湖上遊覧の時間が迫る船上から見る四つの大小の島は湖水に映え旅情を誘う。昏れなづむ岸辺に鹿の姿もあり名残り惜しい。愈々一日目の宿に着く。湖の見える部屋に歓声が揚がる。夕食後湖上に開く大花火を満喫、明日の札幌大会に備え、それぞれ眠りについた。

## 第二日目 全国大会参加と懇親会

宇都宮 徳 風

参加者212名は五台のバスに分乗、洞爺湖温泉万世閣を出発、快晴の中、羊蹄山を眺め乍ら中山峠を越えて一路札幌に入り、会場である札幌厚生年金会館に到着。

大会は定刻、会次第に従って修礼・国歌斉唱・竹末副理事長の辞により開幕され、合吟コンクール優勝杯返還・大合吟・松井理事長の御製謹詠があつて、プロログが終り、第一部の独吟・合吟が行われ終った処で都合により、板垣札幌市長の祝辞が先になされた後、会旗入場。

ついで式典に入り、西岳遙大会実行委員長・松井理事長の挨拶があり、次に横路

知事代理として、豊田副知事の祝辞がありました。続いて中曾根総理・塩川文部大臣外多数の祝電披露があつて式典を終了、約三十分の昼食休憩となつた。

十三時より第二部に入り、神奈川県本部より、新田・岡嶋・草野の各先生の独吟、女性67名による合吟「常盤孤を抱くの囀」男性92名による「九月十三夜」女性51名による「爾靈山」の合吟が夫々見事に行われ万場の拍手を浴びた。又県本部代表女性10名による合吟コンクールは残念ながら優勝には及ばなかつた。

コンクールが終つた処で一行は退場、札幌市内を見物し、定山溪ホテルに入った。ひと風呂浴びて大広間に集合、常盤本部長の挨拶があり、乾杯ののち会食となつた。頃合いを見計って熊沢先生の進行で余興が始まり、民謡・浪曲・ナツメロをはじめ、各チーム毎趣向を凝らした寸劇・群舞・踊りが次々に演ぜられ、感動と爆笑、会員同志の懇親の二時間は瞬く間に過ぎ、盛会裡に閉幕となつた。

思うに今日は県本部会員の総力を結集した一糸乱れぬ合吟参加の満足感と、慰労の宴での懇親効果の醸成は、本部幹事の先生方の御指導の成果であり、今後の県本部の発展に大きな力となつたものと思ひます。

### 第三日目 小樽から雷電海岸・函館へ

中村愛岳

昨夜の楽しい懇親会の余韻を残し、札幌の奥座敷といわれる定山溪温泉をあとにする。三日目の今日も初秋の空はすみわたりに、車窓から見るコスモスや色鮮やかな草花に、秋を満喫しながらバスは一路小樽海岸国定公園へ向い、祝津の練御殿へ到着。バスを下りると、ニシン大尻といわれた網元の邸宅を移建したという練御殿が、朝の陽をうけて岬の上に映え、流れくるソーラン節にはちまき姿の勇壮な漁師姿が目につかび、小樽の今昔に想いを馳せた。

バスは西へと走り、余市のウィスキー工場へ。スコットランドの気候に似た恵まれた環境と、最新の技術を駆使した代表的工場といわれ、試飲のグラスを持つ人々の顔がほころぶ。

工場をあとにバスは積丹半島の西のつけね、雷電海岸をひた走る。その男性的な風光に私達はひきつけられた。特に刀掛岩はその昔、義経に従って蝦夷地に渡った弁慶が刀を掛けたと伝えられる奇岩で目をひいた。海を見下しながら昼食をすませ、キラキラ光る午後の日本海をバックに記念撮影の列が絶えない。

雷電海岸をあとにして半島をよぎり、内浦湾に出て長万部で休憩し、しばらくゆくと車窓から遠く道南の名山、駒岳が美しい姿をあらわし、間もなく大沼国定公園に到着。大沼・小沼には数多くの島々が点在し、こゝでも夕景をバックに記念撮影がつづく。

最後はお目当て百万弗の夜景函館山へ。香港より素敵の声があちこちから聞こえてくる。山頂からは市街地はもとより、広大な湾の全容を一望に見渡すことができ、その素晴らしさにたゞたゞ堪能。大満足で山を下り温の川温泉に到着。その夜も和氣藹々の懇親会を終り、明日のみやげものの事など考えながら最後の夜の眠りについた。

### 第四日目 函館市内を巡って帰路へ

白井寿岳

五時を過ぎると女性の声で明け初める。入浴は早々に切りあげ、みやげ物の買入れ宅配手続きなどで、ホテル売店は大変な賑いであった。今日も空は晴れ上り、日中の暑さを思わせる。函館市内巡りは、啄木一族の墓前を通り過ぎて立待岬に始まる。こゝは、函館山の東端にあたり、津軽海峡を一望に収める。はるか下北半島も遠望でき、青函連絡船始め、行き交う船が美しい。

函館駅近くの朝市を見物する。こゝは特

に海の幸が豊富とか。ちよつとのぞいて宅配便とすれば翌日にはもう届く。さて、函館といえば長崎、横浜とともに、わが国が世界に開いた最初の港。従って、欧米文化の導入も早かったので、異国情緒豊かな街である。とくに、ハリストス正教会始め、「港の見える丘」の散策は、建物にも植物にも、そして雰囲気にも歴史を感じた。

五稜郭公園は、江戸幕府が対露政策の一つとして構築した洋式の城跡。星形をしているので五稜郭と称したが、今では函館のシンボルとなっている。北方領土の現状をふと思い、平和な今日に改めて感謝する。

なだらかな丘陵に赤練瓦の建物はトラピスタヌ女子修道院。遠くから眺めても、近くで見てもまことに優美。清貧・貞潔・従順などの戒律を守って約七〇人の修道女が神への献身に尽くしているという。見学を終えたあとで「ここで生活したい」と叫んだ女の子がいたが、祈りと讚美歌のとき以外の沈黙が果して守れるかな。

楽しく無事に全日程を消化できたのは、正に各役員のご努力の結果にほかならないが、とくに好天に恵まれたことは、吟道練成にいそしむ会員各位の心掛けに天が感じられたものと思われる。羽田空港着陸時には四日続いたという雨はすっかり上っていた。

練吟メモ

○今回は、新教本に出ている「山中問答」以外の詩の「人間」の読みに触れてみたいと思います。その前に復習ですが、日本ではむかしからずっと「人間」を（にんげん）と読んで、世間と人との両方を適当に読み分けて来ました。ところが戦後になってから、それではどうも誤解が生じやすい。中国における「人間」は、人の世とか世間という意味だけなので問題ない。そこで今後解釈を間違わないために人の場合は人間、世間の場合は人間と区別して読む、とこのように変って来たものようです。

○教本一・39

将に東遊せんとし壁に題す 釈月性

(結局) 人間至る処青山有り

(解釈) 世間のどこへ行っても青々とした美しい山が待っている。

(筆者所見) 最近の新釈漢文大系日本漢詩(猪口篤志著)は人間と判読。しかし意は世間。耳なれた方でよいと附記がある。

○教本一・78 棄兒行 (簡につき省略)

○教本二・58

あゝ忠臣楠子の墓 生田鉄石

(第11句) 七度人間に生れて国賊を殺さん

(解釈) 七たび人間に生まれて国賊をた

おそう

○教本二・62

正気の歌

広瀬武夫

(第18句) 七度人間に生れて国恩に報ぜん

(解釈) 七度もこの世に生れて国恩に報

いたいものである。

(所見) 右二句の人間の読みと解釈が逆なのは如何。日本外史の正規の言葉が出処であるから同一に扱って欲しい。

○教本三・9

半夜

良寛

(第2句) 人間の是非は一夢の中

(解釈) 人間社会のことは、是も非もすべ

て夢の中のこと

(所見) 人間の感じが堅いがやむをえない

○教本三・39

母を送る路上の短歌

頼山陽

(第12句)

この福人間得ること応に難かるべし

(解釈) こんな幸福は世間でも得られることは大変に珍らしいことである。

(所見) これは解釈どおり世間である。したがって句の読みは当然人間とすべきであらう。

(附記) 前回詩文の読みは教本に従うのを本筋と記した。教本の検討を望みます。

北海道吟行・狂歌旅日記

◇あゝ惜しや羊蹄(予疋)があつて断わるも

今夜洞爺(とうや)と誘われたのに

◇たゞ酒に普段は下戸の者までも

ついつい過ごすニッカ工場

◇遅くなりやけ(夜曇)気味で行く展望台

見事な夜景にやけに御気嫌

◇この旅はしあわせ一杯腹一杯

連れよし酒よし景色またよし

◇敬老の休みも今日で終りたり

明日は早々家に帰ろう(敬老)

秃象・宇都宮徳風作

(入会)

764 鈴木正子 逗子市池子二一九一三三二

(逗子A) (電)〇四六八一七三一二五四六

765 藤井洋子 逗子市池子二一九一三三二

(逗子A) (電)〇四六八一七三一二五四四

766 岩田久男 葉山町下山口一九二七

(下山口) (電)〇四六八一七五一四九七一

767 沼田東治 葉山町下山口一四九六

(下山口) (電)〇四六八一七五一三一

768 真下二美子 逗子市久木四一六一一四

(銀詠) (電)〇四六八一七二一〇五三〇

(退会)

247 葉狩明風 (風 早) 263 由井良山 (風 早)